

山本天文台の気象測器

武田榮夫

いまから 50 年ほど前、中学生のときに東亜天文学会に入会し、高校時代にかけて何度か「田上天文台」に足を運んでいだ。「田上」と書いて「たなかみ」と読む。いまでは、住居表示からこの地名は消えたが、1950 年代のそのころは「栗太郡上田上村（くりた郡かみたなかみ村）」と呼ばれていた。多感で夢多き時代の自分にとっては、この「田上天文台」は「わが青春の心のふるさと」であった。のちほど、「山本天文台」と改称されたが、これには多少の違和感を抱いたものである。山本一清博士が若き日に留学されたヤーキス天文台のほか、マクドナルド天文台、ローウェル天文台のように、多額の財産を寄贈した富豪や観測家などの個人名を冠した観測施設がアメリカでは珍しくなかった。多分、このような研究風土を体験されたことが、「山本天文台」と改称されたことに繋がったのではないかと思われる。やがて、その影響も加わって、自宅や所有地に持つ観測施設に個人の名を付したアマチュアの「天文台」が全国各地に生まれるきっかけとなった。

その田上天文台を初めて訪ねたときに、研究棟の上に風向風速計が設けられていて、風向計の「矢羽根」が時々向きを変え、「ピンポン球」のような風速計が盛んに回転していた。「天文台」だったので、その光景を意外に感じたのを憶えている。だが、そのうちに、その謎が解けた。庭には百葉箱が設置され、ここでは天体観測のために参考資料として、気象観測も行われていたのである。第一観測室と呼ばれていた山門の 1 階の部屋では、志願助手の方がラジオの気象通報を聞きながら、天気図を描いておられた。毎日天気図を作成し、それらを比較検討し、天気の推移を追ってある程度の予想もなされていたであろう。それを天体観測ができるタイミングを知るひとつの目安とされていたと思われる。



気象庁型指示風向計



四杯型ロビンソン風速計



ジョルダン式日照計



フォルタン型水銀気圧計

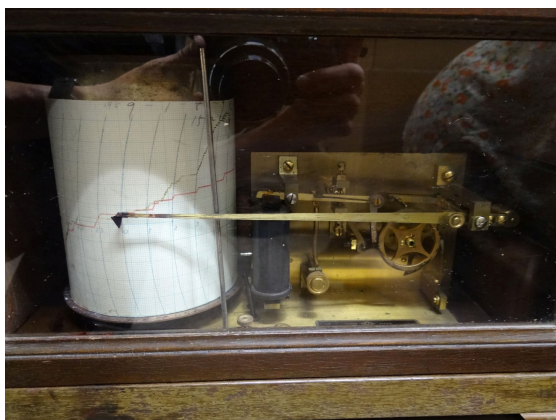


気圧・温度計



湿度・温度計

現地予備調査では、観測棟から当時に用いられた気象庁型指示風向計、四杯型ロビンソン風速計、ジョルダン式日照計、フォルタン型水銀気圧計、気圧・温度計、湿度・温度計などが、さらに京大の研究棟に収められたのちにも週巻きの自記雨量計、自記気圧計も確認された。これらのことから当時、いくつかの気象要素について連続して観測がなされていたことが察せられる。こうした天文台での気象観測をどのように解釈するのか、これにも興味深いものがある。前述のラジオ天気図の作成と合わせて、現地で気象観測から得られるデータも当日や翌日、その翌日の天体観測に生かされたと思われる。日々の天気図を追っていけば、高気圧や低気圧、前線などの気圧系の動きが検討づけられるし、自記記録紙に記されていく気圧の変化傾向を注意深く見守れば、多少の日変化を除けば、天気の下り坂に向かっているのか、回復に向かっているのかは察せられる。いまの段階では保存されていた気象測器の概要について考察を試みたが、観測されていた自記記録紙や観測野帳が今後見つけれられかもしれない。



自記雨量計



自記気圧計

ときの流れで気象の測器も電子化されて久しいが、山本天文台の測器は当時を語る貴重な文化遺産であり、山本博士の観測精神を示す遺品でもある。(気象予報士)